

Conrad の 自 然

—*Almayer's Folly* における—

東 義 郎

Conrad の作品では自然美の描写が最も重要視されなくてはならない、ということを私は信ずる者の一人であるが、その自然は彼の場合、海と熱帯地方の川や森である。前者は帆船と切りはなすことが出来ず、Conrad の詩魂によって象徴にまでたかめられた帆船と海の様々な美しさについては、既に私は「Conrad の Scope 限定と詩 —*The Shadow Line* における—」と題する小論で述べた。この度は Conrad の第一番目に書いた *Almayer's Folly* をとり上げて、熱帯の自然がどのようにとらえられているか、それだけを抜き出すことなく、この作品全体との関連においてみていきたいと思う。それからこの作品の価値を判定し、最後に Conrad の他の作品との関係について多少ふれるつもりである。

I

Conrad は1886年に遂に最後の試験に通り、船長となる資格を得た。船長有資格証明書は疑いもなく喜ばしい財産であった。しかしそれだけでは生活出来なかった。彼はいつまでも船長の地位が空くのを待っているわけにゆかず、1887年2月16日に Amsterdam に留っていた Glasgo の Highland Forest 号 (1,000トンの帆船で Java 行き) の first mate となる。この船では Java に向う途中、帆桁が彼の背中にぶつかる、という事故があり、それから Conrad は奇妙な症候に悩まされるようになった。そこで Singapore の病院に数週間入院

する。そこは町と港を見下す高台にあり、窓辺で風にゆれる palm tree の葉を眺めながら、彼は Amsterdam の恐しい寒さと雪を思い出すのであった。

彼は医師の予想以上に早く直り、2ヶ月後に Vidar 号(800トンの汽船)の一等運転士となる。健康にまだ十分の自信を持てなかったので帆船に比べてずっと楽な汽船を選んだのである。気候にも急な変化はなく、その船の仕事は彼の体には良かった。それは注目すべき事件には乏しかったが、Conrad を作家にするのに大きな役割を演ずるよう運命づけられていた。船はオランダの国旗をかかげ、オランダ領ボルネオのある港に属するもので、コースは途中の色々な港に立寄り、三週間でシンガポールからカリマタ海峡、それから南ボルネオ、セレベス、そしてシンガポールへと戻るものであった。土地の産物を積んだり、下したりするのが船の主な任務であったが、その航海中彼は種々の人々を知り、地方の特徴をのみこんだ。彼は又船長と親しく、この船長からマレー群島についての様々な事実や住民の生活の話を聞いた。混血オランダ人の Almayer は Bulungan (ボルネオの東海岸にある)に住んでいた。この Almayer の外見、それから彼が既に A. について話に聞いて知っていた事、又特にその落ちぶれた有様とまだ抱いている途方もなく大きな野心との対照が Conrad に強い印象を与えた。彼は眼前に人間の想像力と実行力との不調和の実例を見たのであった。彼のエッセイ集、*A Personal Record* (1908) の中に次のような文章がある。

“If I had not got to know Almayer pretty well it is almost certain there would never have been a line of mine in print.”

1889年の6月上旬に彼はオーストラリアへの航海からロンドンに帰った。彼の故郷である、当時ロシア領のウクライナに居る叔父の健康が衰えて、しきりに愛する甥に会いたがっているのです、彼は予定より早く英国に戻ったのであった。しかしロシア政府の定めた形式上の事務手続が厄介で、すぐにはウクライナに行けず、数ヶ月の暇が出来た。又海にその間出ることも考えたが、船長の

口は中々見つからない。かくて今や33才の Conrad は始めて昔の思い出にふけることとなる。それには多少疲労や年齢も与って力あったことであろう。青年時代の向うみずの冒険を求める好奇心に追憶の落ち着いた心が取って代わったのである。最初はぼんやりとはあったが、次第にはっきりと彼の見た様々な人間の姿が心に浮かんで来る。9月のある朝、それは大気が乳白光を発する、ヴェールでおおわれたような、半ば不透明な、それでいて輝かしい秋の日であった。不思議に快適な魅力を有し、うっとりするほどおだやかな London の朝であった。彼は Bessborough Gardens にある下宿で、突然の不可解な衝動に駆られて2年前 Borneo の東海岸で会った人々のイメージを呼び起して *Almayer's Folly* という物語りを書き出した。この小説は完成までに5年を要したのであって彼はその後、仕事の合間に船室の中で書き続けることになる。

II

Almayers' Folly (1894) は12章から成る長篇である。主な人物を挙げると、Almayer は本篇の主人公でオランダ人の貿易商人である。Mrs. Almayer はマレーの Sulu 族の一首長の娘であった。Nina は二人の間に出来た一人娘である。Dain は Bali 島の首長の息子で後に Nina と結婚する。Abudulla はアラビア人の貿易商で Almayer の競走相手であり、Reshid は Abudulla の甥で、その後継ぎであり、Nina を妻に望んでいる。Lakamba は土地の首長で Abudulla と手を結び、Almayer の敵となる。Babalatchi は Lakamba の腹心の部下で軍師ともいふべき智者。Taminah は土地の娘で一商人の奴隷であるが、Dain に恋をする。Captain Lingard は英国人で自分の船を持つ冒険的貿易商である。主な場所は Borneo 島東海岸、オランダ政府の支配下にある Pantai 河下流の村。

章を追って内容を説明すると、先ず初めでは Almayer は河辺の新しく作った事務所のヴェランダで夕方、唯一人、未来の喜ばしい夢にふけている。彼

は25年間自分自身と娘 Nina のために金をもうけようと努力して果さず、苦しい日々を送って来た。しかし富を得る、という夢の実現も間近い。友人の Dain が戻って来さえすれば凡ては解決する。A. は D. の到着を待ちわびている。この辺の文章を一寸抜き出してみる。“He absorbed himself in his dream of wealth and power away from this coast he had dwelt for so many years, forgetting the bitterness of toil and strife in the vision of a great and splendid reward. They would live in Europe, he and his daughter. They would be rich and respected”。

25年前、若く、ほっそりして動作の敏捷な Almayer は白ずくめの服を着、英語がうまく、算数にも長けているのを得意に思いながら、オランダの一郵便船から Macassar (東印度諸島南西部の港市) に降りて行った。彼の胸はこれから有名な Hudig 商会で働いて出世の階段を一步一步上って行くのだ、という期待に満ちていた。彼の父は Buitenzorg (Java 島西部の都市) の有名な植物園で働く下級公務員であり、母は Amsterdam の葉巻商人の娘で、華かな過去の夢を見て現在の貧しさを僅かに慰めている。当時の Macassar は商業貿易が盛で活気あふれる都市であり、大勢の貿易商が出入りしたが、中でも英国人の Tom Lingard は多くの人々から尊敬されていた。L. は自分の船を持ち、過去の数々の冒険で有名であった。かつて Sulu 族の海賊船と戦い、その船に乗り込んで首長の娘を捕えたが、彼女を可愛がって自分の養女とし、彼が本国に戻る前に誰か見込みのある白人とこの娘を結婚させる、としばしば言っていた。

Lingard と Almayer は仕事の関係で度々出会ったが、L. は A. を好くようになり、Hudig の店を去らせて自分の船の船荷監督人にする。L. はそれからある時、A. に自分の養女と結婚してくれ、と言う。A. は娘の財産に眼がくらみ、そのうちに何とか厄介払い出来るだろう、と考えて結婚を承知する。

これは25年前のことである。さてA. は夕食に家に帰ろうと河辺の、今は荒れ果てた事務所を去りかけた時、カヌーが流れを溯つてやって来るのを聞きつけ

る。Dain が遂に來たのだ。しかし D. の様子は前と 変っている。D. は A. の
 年来の敵である、この地方一帯に勢力を振る首長の Lakamba とまず会わな
 くはない、と言ひ、A. とは翌朝会う約束をする。D. は部下の一人と河向
 うの Lakamba の住居に行く。A. は不安な氣持で家路をたどる。娘の Nina は
 父が眠った後も独りヴェランダに残り、広く激しい河の流れを心配そうにじっ
 と見つめている。遠くから雷鳴が聞え、嵐の始まる氣配である。

Captain Lingard は新婚の Almayer 夫妻を Borneo 東海岸, Pantai 河下流の
 村に定住させ、A. を新しく造った貿易事務所の長にし、将来の發展を目論む。
 しかし事は計画通り運ばず、ダイヤモンド鉱山發見に狂奔する Lingard は A.
 を訪れることも稀になり、A. はひとりで事業に精を出すが、土地の者から様々
 な妨害を受け、更にアラビア人の一貿易商が入りこんで来るに及んで、いよいよ苦境に立つ。Lingard は宝の山を發見するが、ヨーロッパに金策に出かけた
 まま、帰って來ない。その中にマレー土人の間でも名を知られた、Bali 島の首
 長を父とする Dain が A. の所にやってくる。A. と D. は親しくなり、Lingard の
 宝の場所を記した紙を既に見つけていた A. は Lakamba と手結び、ダイ
 ヤモンド鉱探検に必要な助力を D. に求め、Nina と相愛の仲の D. はそれを承
 知したのである。探險に出発する 予定日前に D. は用事のため 目分の船に戻っ
 たので、A. はその歸りを待っていたのだ。D. が A. を初めに訪れたのは、彼
 の父の命令により、スマトラ始めマレー群島全体の白人に対する土人の獨立運
 動を助けるべく、火薬を買い集めるためであった。A. は目分の望みを達する
 ために D. が必要だったので、知人の一船長の手を通して D. の船に火薬を運ば
 せる。D. が船に戻ったのはそれに立会うためであったが、Abdulla と Reshid
 の密告でオランダの官憲に追われ、命からがら Nina と会うために村に舞い戻
 ったのである。追われている D. は何はともあれ、今は手を組んで仲間となっ
 ている土地の有力者、Lakamba と前後策を相談する必要があった。

D. は L. の手によって安全な所にかくれ、Nina も Mrs. Almayer もそれを知っているが、他の村人同様 Almayer はそれを知らない。D. が水死したように表面をとりつくろったのは Mr. A. と L. の部下、Babalatchi の二人である。B. は L. に自分達の身の安全のために D. と Nina 二人をオランダ政府の眼をかすめて逃してやらなくてはならぬことを納得させる。そこで一人で待っている D. の許に N. は母と別れて出かける。一商人の奴隷女である Taminah は D. を恋していたが、偶然 D. の生きていてかくれている場所を知り、N. が D. の所に出かけたことを知って嫉妬心から Almayer とオランダ軍に通報する。

A. はオランダの軍隊よりも先きに D. と N. の所に達し、D. を殺そうとするが思い直して自分で舟を漕いで間一髪のところまで逃がしてやる。我が家へ戻った A. は N. を忘れるために家に火をかけ、河辺の大事業を計画して新しく建てたばかりの事務所、それは Almayer's Folly と人々から呼ばれて嘲笑されていたものであるが、そこに移り、終日何もしないで暗い部屋に横たわり、ひたすら忘却の訪れを待っている。Mrs. A. は今や Lakamba の世話を受ける身となって居り、下男の Ali だけが彼のそばについている。Bali 島では N. と D. の間に男の子が生れて盛大な祝宴があった、というニュースが伝わり、N. の母は狂喜する。Babalatchi も老いこんで元気を失い、Taminah はあの事件後、やせ衰えて死ぬ。Almayer もある日遂に死に、それと共にこの物語りも終る。

III

Almayer's Folly の主な人物は Almayer, Mrs. Almayer, Nina, Dain, Babalatchi 及び Taminah であるが、作者の意図は明らかに Almayer を主人公とすることであった。それはこの作を読んでみて、A. の度重なる絶望ということに最も力点が置かれ、再三 A. の悲歎に沈む状態が精細に描かれ、特に終りに近い部分では、具体的であり、リアリスチックであって、際立って力強い迫力を有していることから知られる。

最後の第12章のA.がN.と海岸で永久の別れを告げる場面は感動的である。A.にはもう怒るだけの気力もない。それでも、もし恥も怒りも、何もかも忘れて Nina について行けたらどんなにいいだろう、もし彼女を愛しているのだとはっきり言えたら、どんなに楽になるだろう、とふと思った時、彼はそういう自分の心に恐怖を感じて狂人の様に飛び上って叫ぶ、「決してお前を許さない」と。若い二人を乗せた舟はやがて見えなくなる。A.の全身の力が抜けてしまう。“The face was a blank, without a sign of emotion, feeling, grief, hope, or anger — all were gone, erased by the hand of fate, as if after this last stroke everything was over and there was no need for any record. Those few who saw Almayer during the short period of his remaining days were always impressed by the sight of that face that seemed to know nothing of what went on within: like the blank wall of a prison enclosing sin, regrets, and pain, and wasted life, in the cold indifference of mortar and stone.” この牢獄の冷い、モルタルと石で出来た壁のイメージは非凡である。Conrad 自身マレー群島を船で回る途中、実在の人物、Almayer を目のあたり見たのであって、彼がこの小説で本当に書きたかったものは、正にこの Almayer の絶望ではなかったか、と思われる。哀れな Almayer は砂浜にひざまずき、Nina の足跡を両手で砂をかけて消し、海まで一列の小さな墓を作ってゆく。Nina の存在を忘れ去るためなのだ。それがすむと二人の行ってしまった方向にもう一度、最後の力を振りしぼって、「決してお前を許さない」と叫ぼうとするが、唯、唇がわずかに動いただけで声は出ない。Conrad の見事な表現である。

ところがである。Almayer が生きた人間としてわれわれに感じられるのは、まずここだけで、あとは概して観念的にその内面が説明されているに過ぎない。それは、殆ど A. に事件らしい事件が一つも起らない、あるいは少くとも彼に起った事件は具体的に述べられていない、(Nina との別離を除けば) という

plot の上での欠陥にもよるが、そしてそれがために A. の激しい苦悩もそこだけ全体から浮き上って来るのだが、何よりも Conrad の Almayr という人物に対する理解不十分のためであろう。又、Henry James 流の心理分析はいうまでもなく、Conrad 文学の特色の一つであるが、この作品では唯一箇所、Taminah が酔いつぶれている A. の体を必死になってゆすぶって起す所、を除いては成功しているとは思われない。

“……slowly, out of the senseless annihilation of drunken sleep, he was returning, through the land of dreams, to waking consciousness. Almayr's head rolled from shoulder to shoulder in the oppression of his dream; the heavens had descended upon him like a heavy mantle, and trailed in starred folds far behind him. Stars above, stars all round him; and from the stars under his feet rose a whisper full of entreaties and tears, and sorrowful faces flitted amongst the clusters of light filling the infinite space below.”

上の stars というのは A. の酔眼にうつった Taminah の眼である。長いマントの比喻も巧みであり、躍起となっている T. の姿は、彼の頭上や周囲の星のイメージによって暗示されている。

さて、Almayr の特質は大体次の通りである。1. 物質的幸福を希求し、富を得んとの野心を抱く。絶えず夢を追って、みじめな現実から逃れようとする傾向がある。2. 余りにも自己中心的で娘の心もまるで理解出来ない。3. 意志薄弱。4. 知恵が不足していて、土人からも馬鹿にされている。これらの特質は勿論相互関係にあるものだが、要するに西欧人としての知性が見られるのでもないのに、唯、白人としての自尊心は持っている、という至極平凡な人物で、彼があのような壮絶なまでの苦悩をなめることの出来る人間だとは不自然で一寸考えられない。

Mrs. Almayr は Almayr に比べれば余程うまく書かれている。彼女はスルー族の海賊の頭の娘であったが、Lingard と彼女の父の船とが戦った際に

彼女自身足に深い傷を受け、海に飛び込むことが出来なくて、不本意ながら L. の手に捕えられた。彼女の仲間は一人居らず殺され、火をかけられたその船がはるか遠くに消え去ると共に、14才であった彼女は、これから新しい奴隷の生活が始まるのだ、と思う。これまで大勢の青年達から崇拜され、自分の美しさに自信があったので、L. の奴隷になるのだと思い込み、勇敢な マレーの首長の娘にふさわしく、動ずることなく自分の運命を受け入れようとする。ところが予想に反して Samarang (Java 島北部の海港) の修道院に入って教育を受けることになり、大きな失望を覚える。しかし、それにも堪え、言葉は容易に覚えるが、キリスト教は全く理解出来なかった。更に不幸なことに、彼女は命令的にそれまで見たこともなかった Almayer と結婚させられる。若い頃の彼女の性格はわれわれにもよく理解出来る。

“……in imagination she pictured to herself the usual life of a Malay girl — the usual succession of heavy work and fierce love, of intrigues, gold ornaments, of domestic drudgery, and of that great but occult influence which is one of the few rights of half-savage womankind.”

heavy work, fierce love, intrigue, gold ornament, occult influence, これらのイメージは一般のマレーの女達の生活を簡潔に、巧みに浮び出させるものであるが、それは又一般のマレーの女達と異るところのない彼女の性格をも、よく示している。だが、Almayer と結婚してからの彼女の心理の説明は平板であって、多少真実味を欠き、このような問題は Nina の混血娘としての苦しみと同じく、Conrad にとっても困難であったと思われる。妻としての Mrs. Almayer は夫を憎み、軽蔑し、専ら彼に対しては不気嫌な沈黙を守っているが、時々野蛮な罵言を猛烈に浴びせかける。彼女の精神的特徴を次に挙げる。

1. 野性的で半ば野蛮な女だが、Sula 族の一首長の娘としての誇りを持ち、誠実、忍耐、勇気の徳を有す。その勇気は Nina や Dain のそれと同じく生命力に満ちた勇気であり、更に Conrad 独得の浪漫情調を漂わせるものである。

2. Babalatchi も舌を巻くほどの実際的な智慧がある。3. 白人の卑劣さ、精神の弱さを軽蔑しているが、その物質的力を恐れている。

Nina の性格は混血児であるためか、あいまいに描かれている。N. は Almayer と同じ位の身長があり、混血の娘にしては背が高い、美しい娘である。横顔は父親に似ているが、顔の下方の部分はスールー族の血を引いて、顎が張り、意志の強固さを示している。眼はマレーの女達のように黒く、やさしい光を帯びているが、西欧人の優れた知性のひらめきが見られる。彼女は Lingard によって Singapore で強制的に教育を受けさせられるが、混血のために下宿の主婦とその娘達のひどい侮辱を受け、白人一般に対する憎しみを抱いて父の許に戻って来た。家に帰ってからの N. は新しい環境にすぐ順応し、表面は平穏な生活を送る。父親には時々思い出したようにやさしい愛情を示すが、母親により深い繋りを見出す。N. は母の昔語りを聞き、次第にその影響を受けて、文明道徳の衣を脱ぎ棄てて野性に帰って行く。彼女は父の血を引いて多少決断力に欠ける、という点を除けば、大体その母と同じ気質である。その眼には西欧人の知性のひらめきがある、というが、具体的な行動によってその知性が示されることは殆どない。何時も母親と違って白い服をきちんと身につけ、落ち着いた態度を保ち、Dain と逃げる時に未知の世界に対する恐れを一瞬覚えて母に励まされる、というような点を別とすれば、土人の女と変りがない。しばしば、N. は人形の様にぎくしゃくと作者の操る糸によって動く感を与える。ただ、彼女が父と一緒にオランダ海軍の士官達の相手をしていて、Dain のために彼等の部下の二人も死んだ事を聞かや、「たった二人なの！」と叫んで彼等を啞然とさせるくだりは、N. の激しい気性をよく示して面白い。

Dain の人物創造も成功しているとは思われない。彼はバーリ島の高名な首長の息子にふさわしく、勇敢で高邁な精神の男である。冷静沈着であり、知力も秀でている。だが Nina を恋し、N. からも愛されるようになると、自分の大目的をいとも容易に忘れてしまうのはどうしたものであろうか。彼は正に骨

抜きにされるのである。この様な人物は Conrad の後の作にも何度も主人公として登場して来る。Thomas Moser は *Joseph Conrad, Achievement and Decline* (1957) と題する本の中で、Conrad は love を正面から扱うと文体は驚くほど散漫となり、表現は不正確なものとなる傾向があることを詳細に論じているが、私も全く同意見で、メロドラマチックな愛の叙述がだらだらと果てしなく続くのは Conrad の一つの大きな弱点であろう。

Babalatchi は Lakamba の腹心の部下で参謀格の片目の老人である。貪欲で狡猾なところもあるが、勇敢で主人に忠実な面もあり、人生に関して諦観めいた言葉や ironic な見解を述べることもあって、中々複雑な人間だが、それでも十分に理解し得る人物である。時にもったいぶるその態度は humorous であって一つの風格を備えている。彼も又 Mrs. Almayer と同じく白人の愚かさに対する軽蔑と武力に対する恐れを抱いている。又老人であるが、前から奴隷娘の Taminah に目をつけていて、そのしなやかな体を眼を細めて眺めたり、Dain と Nina 脱出事件後、T. をその主人から安く買い取って、片思いの悲劇によって痩せ衰えた T を肥らそうと努力するあたり、人間味があっとうまく書かれている。“I am like a white man talking too much of what is not men's talk when they speak to each other.” これは物語りの終の方で Almayer の知人である Ford 船長と話していて、B. が思わず過去を懐かしみ、現在の頼りなさを打明けた時の言葉である。

Taminah は Dain を秘かに恋し、恋仇 Nina を激しく憎み、D. と N. が逃げることを Almayer とオランダ軍に知らせる娘である。この Taminah と Babalatchi は共にこの作で最も血の通った、立体的な人物である。だが特に T. は魅力がある。T. は心の単純な自然児であるので、その生活や性格は自然を背景にして語られ、自然に関する種々の美しいイメージを用いて熱帯の自然を描写すると共に、彼女の内面をも見事に暗示する。

“She lived like the tall palms amongst whom she was passing now,

seeking the light, desiring the sunshine, fearing the storm, unconscious of either.....The absence of pain and hunger was her happiness and when she felt unhappy she was simply tired, more than usual, after the day's labor. Then in the hot nights of the southwest monsoon she slept dreamlessly under the bright stars on the platform built outside the house and over the river. And she closed her eyes to the murmur of the water below her, to the whisper of the warm wind above, ignorant of the never ceasing life of that tropical nature that spoke to her in vain with the thousand faint voices of the near forest, with the breath of tepid wind; in the heavy scents that lingered around her head; in the white wraiths of morning mist that hung over her in the solemn hush of all creation before the dawn"

IV

Almayer's Folly の物語自体は非常に興味ある、というものでは全くなく、一言で言えば極めて通俗的なものである。物語りの視点は自在に主要人物に移り、各主要人物の眼を通して事件が観察される。ただ、物語りの進行は時の順序を追わず、殆どの場合、先ず印象的な場面を読者の前にパツと持ち出し、それからそれまでの事態を説明する方法を取っていることは Conrad の手法の一つだが、ある程度この物語の退屈さを救っている。(この方法を濫用する傾きが後の Conrad に見られるが、ここでは一応成功している。) 場面のみならず、筋の展開においても Conrad は既にこの作で前述の手法を採用しており、河辺で Dain を待っている Almayer の姿を最初に読者に示し、重大な事件をはらむ現在をいきなり持ち出して我々の注意を引きつけ、次いで A. の過去に溯りそれから N. と D. の逃走と A. の絶望へと筆を運んで行く。

Almayer's Folly の main plot は明かに「野心を果さず失敗した男の生涯」である。subplot は①「白人とマレー土人との対立及び抗争」、②「混血

娘の悲劇」,③「男女間の愛」,④「片思いの悲劇」と,この4つであろう。ところでこの作の plot 上最も大きな欠陥は,main plot はあることはあるが,主人公の Almayr に起った事件は殆ど具体的に述べられていないことである。富を憧れるA.は大きな期待,夢想,幻滅,絶望の過程を少なくとも4回は繰り返すのだが,それらはA.の自分だけの力では何も出来ない,凡て他に頼らなければならない夢であり,又実際に夢に留ったもので,彼自身は唯座して徒らに待つといった感を受ける。そこで先にも少しふれた様にA.の絶望は甚だ実感に乏しく,必然性をもってわれわれに迫らない。その結果として,subplot であるべきものが不当に大きく扱われ,それぞれ main plot の位置を争うこととなった。要するにまとまりのない作となったのである。subplot ①は土人の独立運動,Almayr と Mrs. Almayr の不和,土地の者とA.の対立等を含むものであるが,②と同様観念的に扱われ,③は内容,表現共に陳腐な部分が多く,④も平凡なものであれば,優れた作となり得ないわけである。③について一例を挙げる。Nina の愛の眼差しに Dain は一切を忘れる。“……a look that is more stirring than the closest touch, and more dangerous than the thrust of a dagger, because it also whips the soul out of the body, but leaves the body alive and helpless, to be swayed here and there by the capricious tempests of passion and desire;…… Men that had felt in their breasts the awful exultation such a look awakens become mere things of to-day — which is paradise; forget yesterday — which was suffering; care not for to-morrow which may be perdition. They wish to live under that for ever……”

荘重な文章のリズムもここではむしろわれわれの微笑を誘う。

V

Almayr's Folly を内部から支える要素,即ち精神的諸価値に分けるなら

ば次の様になるだろう。①「人間の愚かさと弱さ」, ②「courage, fidelity, patience 等の美德」, ③「男対女の愛と憎しみ」, ④「父と娘の愛」, ⑤「熱帯地方の自然」, ⑥「諦観に裏打ちされた人生肯定」, ⑦「人間同士の利己心による結びつきと抗争」。

①は主として Almayer の生涯によって表わされているが、先に述べた様な plot 上の欠点のため、全体に及ぼす力は弱い。Conrad の本来の意図は「人間は生との戦いに敗れるものだ」という彼自身のペシミズムに基いて、人間絶望の極致のある美しさを中心に据えることであったらしいが、効果としては Almayer は単なる人間の愚かさと弱さを示す人物となっている。④については、この要素は扱い方によっては相当な重要性を持ち得るのだが、ここでは A. の N. に対する愛情は余りにも自己中心的なため、娘の心も理解し得ない盲目的愛であり、N. の父に対する愛も単に習慣によって生じたもの、という風に公式的に描かれているに過ぎず、これもまた力は弱い。⑦は具体的な事件の叙述が殆どないので、Babalatchi という老人がわれわれの興味を幾分惹くに止る。③は概して月並であってこの作の質を低くする主要要素であるが、ただ、Tamiah が恋に目覚め、その喜びに陶醉し、又その苦しみに悶える様が、自然児 T. にふさわしい状況設定と比喻によって表現され、われわれの心を動かす。

“Then she paddled home slowly in the afternoon letting her canoe float with the lazy stream in the quiet backwater of the river,…… her eyes wide open, listening intently to the whispering of her heart that seemed to swell at last into a song of extreme sweetness.”

T. は Nina と Dain が相愛の仲であることを知って激しく苦しむ。

“Her jealousy and rage culminated into a paroxysm of physical pain that left her lying panting on the river bank, in the dumb agony of a wounded animal. But she went on moving patiently in the enchanted circle of slavery, going through her task day after day with all the pathos

of the grief she could not express, even to herself, locked within her breast.”

⑥は Babalatchi の言動と物語りの終りの Abudulla の態度によって表わされる。特に後者は終りにあるために全体効果に及ぼす影響は少くない。Almayer も遂にある日死ぬ。村人は Almayer's Polly と呼ばれる建物の前に半円を作って並んでいる。Abudulla も Reshid を従えてやって来る。彼の年来の敵であり、東海岸唯一の白人もとうとう死んでしまったのだ。Almayer の死に顔は無関心な人々の眼の前で、雲一つない空の下、漸く死ぬ前に凡てを忘れることが許された、というおだやか表情を浮べている。Abudulla は彼が幾度も戦い、幾度も打負かして来た、この敵の姿を悲しげに見下す。これが不信心者の報いなのだ。この年老いたアラビア人の胸には、彼の人生から次第に消えて行くものへの悲しみが溢れている。彼自身も又遠からずして、友情だとか敵意、成功や失敗等、人生を作り上げているこれら凡てのものを後にしなくてはならないのだ。今後は余生を神への祈りに捧げることにしよう、このような殊勝な気持になって、Abudulla は甥の Reshid に呼びかけ、敵かに慈悲深い Allah の御名を唱えながら群衆をかき分けて去って行く。このあたりの文章を示すと、

“Yet in the Arab's old heart there was a feeling of regret for that thing gone out of his life. He was leaving fast behind him friendships, and enmities, successes, and disappointments — all that makes up a life ; and before him was only the end. Prayer would fill up the remainder of the days allotted to the true believer !”

これはN.とD.に男子が生れたという噂と共に概して暗いこの物語りをかなり明るくする効果を持つことは否定出来ない。人生とは喜びと悲しみ、敵意と友情、成功と失敗、善と悪等々様々なものから成るものであって、それら凡てを包容する大きな全一体なのだ、というおおらかな人生肯定の境地、そしてそれと同時に過去って行こうとする生への老人の抱く愛惜の情が、この Abudulla

の最後の描写によってほめかされている。かくして *Almayer* の悲劇も 普遍的な人間の営みへと還元され、嵐の鎮った後の静謐ともいうべきものをわれわれは感じる。だが既に述べた人物描写、plot の組立の上での欠陥のためにこの部分だけが全体から浮き上った、とってつけたような印象を与えることは遺憾である。

②は⑤に次いでこの作の美的効果を作り上げるのに貢献する。この要素は主として Mrs. Almayer, Nina, Dain 及び Babalatchi によって具体的に形を示すが、Conrad 特有の浪漫情趣に染め上げられている。往々にして単純、幼稚、陳腐に墮す嫌いはあるが、お上品振りとか偽善とは正反対のものであり、いわば力強い原始的生命感の流れをまっすぐこれらの美德の鋳型に流しこんだようなもので、われわれは退屈の砂地に宝石を見つけることもある。次の文は Nina が母親の昔語りを聞いて、ある意味では健全な野性に戻って行く部分から抜いたものである。“To her resolute nature the savage and uncompromising sincerity of purpose shown by her Malay kinsmen seemed at last preferable to the sleek hypocrisy, to the polite disguises, to the virtuous pretences of such white people as she had the misfortune to come in contact with.”

オランダ軍に追われて潜伏している Dain の許に行こうとする Nina に Mrs. Almayer は言う，“Do not let him look too long in your eyes, nor lay his head on your knees without reminding him that men should fight before they rest. And if he lingers, give him his kisser yourself and bid him go, as the wife of a mighty prince should do when the enemies are near……”

⑤はこの作中に清々しい雰囲気をもたらす唯一の、そして又強力な積極的価値である。一体に Conrad の作品では自然は物語りの単なる背景や人物の舞台に止らず、霊的存在にまで高められ、生あるいは死、善あるいは悪の象徴として表わされることが珍らしくない。*Almayer's Folly* では自然は主に生の象徴として示され、魅力あるものとなっている。Nina と Dain が Almayer の眼を盗

んで会っている所を引くと, “In a moment the two little nutshells with their occupants floated quietly side by side, reflected by the black water in the dim light struggling through a high canopy of dense foliage; while above, away up in the broad day, flamed immense red blossoms sending down on their heads a shower of great dew-sparkling petals that descended rotating slowly in a continuous and perfumed stream; and over them, under them, in the sleeping water; all around them in a ring of luxuriant vegetation bathed in the warm air charged with strong and harsh perfumes, the intense work of tropical nature went on: plants shooting upward, entwined, interlaced, in inextricable confusion, climbing madly and brutally over each other in the terrible silence of a desperate struggle towards the life-giving sunshine above — as if struck with sudden horror at the seething mass of corruption below, at the death and decay from which they sprang.”

色彩の対照, 静と動の対比, 的確な比喻, 鮮かなイメージ, 躍動的な語のリズムと内容を暗示するような響き, これらが相俟って熱帯の自然のエネルギー, その美しさを素晴らしく読者に伝え, のみならず若い二人の生活に巧みな間接照明を当てている。

VI

上に挙げて説明した7つの要素はもとより相互関係にあり, 影響し合って効果を生ずるものであるが, われわれの第一に受けるのは中心のない, 不統一の印象である。これは完成までに5年を要し, 船の仕事の合間に書いた, という事情に基くものと思われる。だが, そればかりでなく, Conrad の作家としての技術上の未熟さ, 手に余る題材を選んだこと, 彼に与えられたテーマを未だはっきり自覚していなかったこと等も考えられる。かくて *Almayer's Folly* の価値といえはその部分に求める外はなく, それは既に何度も挙げた実例によって

知られる通り Taminah という人物を生み、Nina と Dain の恋愛を助ける、生
の象徴として表現された熱帯の自然、この自然の詩である。

Conrad のペシズムは次に書かれた *An Outcast of the Islands* (1895)
において色濃く表われ、殆ど最後まで一貫して彼の作品より窺われるものであ
るが、早くもこの *Almayer's Folly* にその萌芽が見られる。それは Almayer
の失敗と絶望は勿論であるが、Mrs. Almayer や Babalatchi の白人観にも現
われている。彼等の勇気、忍耐、誠実をもってしても軽蔑すべき、二枚舌の白
人の武力には歯が立たないのである。「人生においてはかかる美德を有する善
人が栄えるとは限らない、否むしろ善は悪にのみこまれる傾向がある、しかも
その悪は各人の内部に巣くっている。」といった、どうにも救いようのない人
生観は彼の後の作において再三再四表明されているが、*Almayer's Folly* でそ
の一端を覗かせている。

筋を展開し、場面を描出する場合、印象的な部分を先に持って来る方法は
Conrad の手法の一つであることは既に述べたが、Conrad に人物創造の才が
欠如していたことは、この作でも Taminah と Babalachi を除けば人物描写
は凡て不成功であることから知られる。また、物語りの要素は小説になくは
ならないもので、Conrad の小説にもそれは欠けてはいないが、どの作でも大
して面白いものではない。*Almayer's Folly* の場合も例外ではない。Conrad
特有の心理描写はこの作でも既に見られるが、他の作に比べれば量的に少いだ
け幸いである。彼の優れた才能は雰囲気を絶妙に伝えるところにあると思うの
だが、それはこの作でもかなりよく発揮されている。だが何よりも Conrad の
強みとする自然を靈化し、自然に詩的な魅惑を生じさせる、彼自身十分自覚し
なかったのではないかとも思われる天才は、彼の他の多くの作品よりもその中
においてより多く生かされているので、色々な欠点はあるが、この *Almayer's
Folly* は芸術的価値において *Youth*(1898), *The Shadow Line* (1915) に
次ぐものであると私は考える。(1961.8.26)